

弔 辞

駒沢大学総長 桜 井 秀 雄

右代読副学長 阿 部 肇 一

大野先生

万物が活躍し、萌え出る五月の候というのに、先生はすでに還らぬ人となってしまいました。ついこの間長い病床生活を蹴って元気に大学へご出講いただき一同慶んでいたのも束の間、再手術のために病院へお出かけになったのが最後となってしまいました。

詢にわが大学にとりまして残念至極というほかありません。

先生は昭和三十三年四月本学文学部教授としてご就任を戴きまして以来、今日まで二十有五年の間教育に、ご研究に精進されて参りました。この間旧制大学から新制大学へ移行した駒沢大学の生みの苦しみや、つゞく荒れに荒れた大学紛争の波を被り、大学改革のために身を挺して参られました。

時にあつては最悪の事態に直面しても、あたかも世俗の事と割りきって超然として己が天職に邁進されていたこともありました。「常に本分を忘却せず全力を尽す」の先生の人生観はまさに道元禅師の「明日を待たず今日今時を勤めよ」との遺訓に沿うものといえましよう。

大学のすべてが不十分な思いをされた時代から、易々として一貫本学を愛しておられた理由、行学一如にもとづく精神に培われた教え子たちの誠実さと大学の自由な雰囲気をごよなく愛されたからだと漏れ承っております。詢に先生のご心底を伺い

知った思いで嬉しく存じたことでした。

まだまだ本学の為、ご助力を願わねばならぬ矢先きの訃報に断腸の思いで一杯です。今後先生の分まで力をつくし努力する所存です。どうか先生の御霊の安らかに眠られんことを祈ります。

昭和五十九年五月十三日

弔 辞

駒沢大学文学部歴史学科

主任 葉 貫 磨 哉

大野達之助先生 長い間駒沢大学歴史学科の教室の発展のために御尽力を頂き本当に有難とう御座居ました。

思い出せば確か先生は、昭和三十三年の四月より、文学部教授として教鞭をとられ、今日まで二十六年の教壇生活を過されました。この間には多くの学生を導かれ、また教室の運営と和やかな研究生活の出来る雰囲気作りに精進されました。

特に昭和三十九年四月より佐藤堅司先生の跡を嗣いで学科の責任を負われ、四十年代の学園紛争のさ中はこれらの重責を負って奔走されました。これら多忙な時期に他所の学生研究会の指導をも兼ねたり、微笑会の顧問をなさったり積極的に教室の便宜を計り、学生の相談に応じたりして下さった事は先生の優しい思いやりの片鱗をかい間見た気が致します。また学生の見学旅行にも時折引率され御自分が満足されるまで説明されたり、正規の授業は一時間たりとも休むことなく、先生の授業に休